

# 世紀の終りと「黄禍」の誕生

——カイザーとその寓意画，および三国干渉——

飯 倉 章

《Abstract》

**The Yellow Peril :  
The German Kaiser Wilhelm II, His Cartoon and  
Their Relation to the Triple Intervention**

Akira Iikura\*

The phrase "Yellow Peril" became popular because it summed up the idea that the rise of the yellow race was a danger to the white race. It was the German Kaiser, Wilhelm II, and his cartoon that propagated the Yellow Peril idea around the world and popularized it in the Western political arena. There are, however, some misunderstandings over the Kaiser's role in the Yellow Peril. First, this essay attempts to clarify the genesis of the phrase "Yellow Peril" and its relation to the Kaiser's cartoon embodying his idea of the Yellow Peril. Although the Kaiser seems to have believed himself to be the inventor of the phrase, there is no evidence proving this. There is also no evidence that the Kaiser's cartoon was originally entitled "the Yellow Peril," although this belief has been widely held. Next, this essay considers the effect which the Kaiser's idea of the Yellow Peril had on the decision-making process of the Triple Intervention of 1895, the intervention by the three powers, Russia, Germany and France, which forced Japan to renounce the possession of the Liaotung Peninsula. As the Kaiser sent the cartoon to his cousin, Tsar Nicholas II, and propagated the Yellow Peril idea just after the intervention, it has been argued that the fear aroused by the Yellow Peril played a major role in the intervention. The fact is, however, that the Kaiser used the fear mainly as a means of justifying the intervention. Lastly, this essay examines the contemporary reaction to the cartoon. Admittedly, it caused a mild sensation in the Western political arena. However, it also became a subject of amusement. In fact, some ridiculed the cartoon as much as they did the Kaiser's idea of the Yellow Peril itself.

---

\*城西国際大学専任講師・研究員

## I. はじめに

「黄禍」とは、黄色人種やその国家の勃興、すなわち近代化が、白色人種やその国家にとって大きな脅威となるという考えである。この「黄禍」思想を西洋世界にもっとも積極的に喧伝した人物がドイツ皇帝ヴィルヘルム二世であり、それが西洋世界に流布されるきっかけとなったのが、カイザーの画案になる寓意画（図-1）<sup>(1)</sup>であることはよく知られている。三国干渉の後にロシア皇帝ニコライ二世に贈呈されたこの寓意画は、西洋世界にセンセーショナルな話題を提供した。「黄禍」の説明には、カイザーとこの寓意画は欠かすことができない。しかし、カイザーと「黄禍」については、誤った見解も幾つか流布してきた。たとえば、「黄禍」の語源がカイザーに求められるという、カイザーを「黄禍」という語句の造語者とする考えなどがそれである。また、カイザーの寓意画に当初から「黄禍」という題があったという見解も一部にあるが、これも事実と反している（実際は、後に「黄禍の図」と呼ばれるようになったものである）。さらに、三国干渉の際にカイザーの「黄禍」思想が果たした役割を過大視し、あたかも「黄禍」思想から三国干渉が生まれたかのような議論も一部にあるが、これも疑問である。実際には、三国干渉の政策決定

(図-1)



過程での「黄禍」論の影響は、さほど大きなものとは言えない。本稿は、三国干渉の前後から世紀の終わりまでの期間を主として、ヴィルヘルム二世の「黄禍」思想や、その寓意画をめぐって紡ぎあげられてきた様々な見解を、改めて検証する試みである<sup>(2)</sup>。

本稿では、最初に「黄禍」という語句が誕生し、流布する経緯について、カイザーの寓意画にふれながら考察を試みる。ついで、三国干渉とカイザーの「黄禍」思想の関係を、カイザーへの助言者やカイザー自身の「説明」などを織りまぜて検討する。さらに本稿では、カイザーの寓意画を同時代人がどのように受けとめたかについても明らかにする。

## II. カイザーの寓意画と「黄禍」の語源

### 1. カイザー造語説について

ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世の寓意画が描かれたのは、1895年夏頃と言われる。カイザーは画案を彼の絵の教師であったクナックフスに提供し、両者の協力によりこの絵は完成した。皇帝自身によるという寓意的な解釈では、絵の左上の十字架の下で、鎧で身を覆っている女性たちは一人一人が当時のヨーロッパ諸国を象徴している。その先頭で手に剣を携えているのは、大天使ミカエルで、その左手が指している対岸が東洋である。そこでは、火災が起こっていて、炎の上には龍が、その背中に仏陀を背負って、西洋の都市にせまっている。皇帝は、この絵の余白に書きこんだ。「ヨーロッパの諸国民よ、汝らの信仰と祖国の防衛に加われ!」。この寓意画は、カイザーの従兄弟であるロシア皇帝ニコライ二世を初めとして、ヨーロッパの王室、欧米の政治指導者に贈られて、19世紀の終わりに最も話題を集めた政治的なイラストのひとつとなった<sup>(3)</sup>。

この絵に触れて、大正2年(1913年)、中国学者の桑原隲藏は、「黄禍論」と題する評論にこう書いた。「黄禍論が一般の注意を惹くに至ったのは、ドイツ皇帝が『黄禍』と題した、一幅の寓意画を作った以来のことである」。さらに桑原は、それが日清戦争末期の「三国干渉の起こらんとする前後に」草案されたことを指摘し、次のように述べている。「一言一行世間の注意を惹くドイツ皇帝の意匠に成った、この奇抜な寓意画は、頗る当時の耳目を聳かした。いわゆる黄禍という文字も、この時以来盛に使用されることとなったが、実際の所、当時日本は三国干渉の為に大挫折を受けて居る」<sup>(4)</sup>。

日本では、当時も、そして幾つかの文献では今日でも、この桑原の見解と同じような説

明がなされてきて、一種の「黄禍」をめぐる通説を形作ってきた。だが、実際のところ、この一般にも流布したと言える説明には、当時の資料上の制約などからやむを得ないことであるが、幾つかの誤りや疑問点が指摘できる。

そのひとつは、この寓意画の標題である。桑原は『『黄禍』と題した』と書いているが、この寓意画に「黄禍」という標題が最初からあったという証拠はない。また、そう推定することにも無理がある。当時この寓意画を紹介した文献に当たってみると、先に述べた「ヨーロッパの諸国民よ、汝らの信仰と祖国の防衛に加われ！」という標題（文献によっては多少字句が変わる）は紹介されているものの、「黄禍」という標題は見あたらない<sup>(6)</sup>。事実としては、当時、キャッチフレーズとして「黄禍」という語句が一般に流布し始め、カイザー自身がこの絵を使って「黄禍」思想の喧伝につとめたことから、ジャーナリズムなどでこの寓意画が、自然と「黄禍の図」と呼ばれるようになったと考えられる。

このカイザーの寓意画の題名は、「黄禍」の語源の探求にかかわってくる。「黄禍」は、英語では The Yellow Peril、ドイツ語では Die gelbe Gefahr、フランス語では Le péril jaune である。「黄禍」の語源についても、一般に流布したが、誤った説がある。それはカイザーが、この言葉の造語者であるというものである。もしもカイザーの寓意画に、最初から「黄禍」という標題がついていたならば、その使用例も1895年まで遡ることになり、後に詳しく述べるようにそれ以前の使用例が見あたらないことから、「黄禍」という語句の造語者はカイザーということになってしまう。

カイザー自身、カイザー造語説とも言うべきこの説の流布に一役買っている。カイザーの歯科医師であったアメリカ人、アーサー・N・デーヴィスは、『私の知るカイザー』という回顧録のなかで、カイザーが語った言葉を記録している。それによるとカイザーは、「黄禍」とは、「私が長いこと認知してきた脅威である。実際、この『黄禍』という語句を造ったのは私なのだ」と述べたという<sup>(6)</sup>。この会話は1908年とされている。その2年前の1906年には、サンフランシスコ市での日本人学童の「人種分離」問題に端を発して、日米関係が緊張した。この問題は、セオドア・ローズヴェルト大統領の取りなしで、一応の解決をみた。カイザーの会話は、そのことに触れたもので、ローズヴェルトが「黄禍」をかるうじてくい止めたと評価して、先の発言となったのである。だが、この種の話を受取ることは難しい。会話の相手がアメリカ人医師で、カイザーはその前で自身の先見の明を誇りたいと思ひ、多少の潤色をほどこしたのではと考えられる。また、米国の『リビング・エイジ』誌の「黄禍」と題する論説では、カイザーが公的な声明に「黄禍」という語句を用いた最初の政治指導者であると述べられている<sup>(7)</sup>。これは事実かもしれないが、公

的な声明に最初に用いたからといって、カイザーが造語者であるという証拠にはならない。実際、カイザー自身の『回顧録』では、「黄禍」には触れているが、自分が造語者であるとは述べていない<sup>(8)</sup>。この点も、考慮に値するだろう。

カイザー自身、自分が造語者であるかのような誤解を生むようなことを書いていたのも事実である。たとえば、カイザーがツアーに送った1907年12月28日付けの書簡では、大隈重信が神戸商工会議所でおこなった演説で英国世論が紛糾したことに触れて、次のように書いている。「いまや、英国の新聞は、初めて私の絵に由来する用語『黄禍』を用いたのだ。それは現実のものとなりつつある」と。しかし、この書簡集の注には、編者によって、「言うまでもなく、彼 [カイザー] は『黄禍』という用語の著作権を有してはいなかった」と書き加えられている<sup>(9)</sup>。また、カイザーと「黄禍」の語源を丹念に追ったドイツの研究者ゴルヴィッツァーも、カイザーの使用例は1900年以降であるとして、カイザーの造語説を否定している<sup>(10)</sup>。

## 2. 「黄禍」の語源について

カイザーでないとする、誰が「黄禍」という語句の生みの親であろうか。ゴルヴィッツァーは、英米独仏露の文献を広範囲にわたって調査して、当時の新聞・雑誌から、その最初の使用を1896年まで遡っている。それによると、「黄禍」の最初の使用例は、ドイツの文筆家W・クリーブスがベルリンの『クリティーク』誌の1896年4月27日号に寄せた「黄禍と蒼白の恐怖」という論文にまで遡ることができる。クリーブスによると、この論文はすでに1895年に書かれていたという。また、ドイツの新聞では、有力新聞の『アルゲマイネ・ツァイトゥング』紙の1897年12月7日の記事に、「黄禍」の語句の使用例がみられる。しかし、ゴルヴィッツァーの調査では、1895年から1900年までには、ドイツでのこの語句の使用例はほとんどないに等しいという。この語句が頻繁にドイツで使用されるようになるのは、1900年、義和団事変でドイツ公使が中国人に殺害され、ドイツ世論が「黄禍」の話題で沸騰してからである<sup>(11)</sup>。

これにたいして、同じ期間のフランスの報道は異なる。ゴルヴィッツァーが指摘しているように、この時期、フランスでは再三にわたり「黄禍」が取りあげられており、議論にもなっている。ベルギーの銀行家で領事でもあったアルフォンス・アラードは、『ルヴェ・ジェネラル』誌の1896年3月号に「黄禍」と題する論文を寄せ、突然メディアが「黄禍」を取りあげ始めたと述べている。アラードに寄れば、それは日清戦争の下関講和条約

締結後であるという。また、『ルヴュ・ポリテイク』誌のルイ・ヴィニョンの論文『「黄禍」』でも、「『黄禍』という語句は、非常に新しいものであるが、すでにその意味は一義的に定めることはできない」とその多様性を指摘しながら、「黄禍」論への批判を試みている。また、1898年に発表された「黄色の幻想」という論文では、経済政策家のアンリ・ブレニエが、フランスのいたるところに「黄禍」というキャッチフレーズが蔓延していると指摘している。このような指摘をみると、フランスでは早い時期に「黄禍」というキャッチフレーズが使用されるようになったことがうかがえる。ゴルヴィッツァーはこう結論している。「世紀の変わり目の前で、フランスの使用例が豊富で、ドイツでの使用証拠が少なく、また他の国で使用例が見当たらないことなどを比べると、このキャッチフレーズ[黄禍]が、ライン河の西で生まれそこで広まったということに多くの人々は賛成するだろう」と。またゴルヴィッツァーによれば、英米での使用例は、1900年以来ということである<sup>(12)</sup>。

以上から見ても、具体的に最初の使用例を特定することは困難であるが、「黄禍」という語句が、だいたい日清戦争後に次第に西欧で一般化して来たこと、それもドイツよりもフランスの言論界で多く唱えられる傾向にあったことが言える。

しかし、「黄禍」という語を造語したのではなかったにしろ、その基本となる考えを公的に示して、「黄禍」を脅威とする考えが西洋世界に広まる言わば火付け役となったのが、ドイツ皇帝であったことは間違いない。実際、皇帝自身の考えを一言で明白に言い表すキャッチフレーズとして、「黄禍」はぴったりのものであったと言えるだろう。次には、三国干渉と「黄禍」思想の関係や、カイザーが「黄禍」の脅威を説いた経緯を検討し、ついで19世紀末に最も話題を集めた政治的寓意画となったカイザーの寓意画についてさらに詳しく述べてみよう。

### III. 三国干渉とカイザーの「黄禍」思想

#### 1. 三国干渉と「黄禍」思想

1894年に起こった日清戦争は日本の勝利に終わり、翌年の4月に結ばれた下関講和条約で、日本は清国から遼東半島の割譲を認められた。しかし、条約の内容が公になるやいなや、ロシアを中心に、ドイツ、フランスを加えた三国がこの割譲に異議を唱え、武力を背

景に共同通牒を突き付け、遼東半島の清国への返還を勧告した。日本政府は、やむなく勧告に従った。これが三国干渉である。それは明治維新以降、西洋流の近代化に努め、その結果、清国にたいして予想外の大勝をおさめた「新日本」が経験した、最初の大きな外交上の挫折であった。この三国の介入に、日本国民は大変な屈辱を感じ、思想界にもナショナリズムが高まり、対外強硬論やロシアに対する好戦的な世論が次第に力を持つようになって行く。三国干渉は、日本におけるナショナリズムの高揚のきっかけとなったとも言える。

ところで、この三国干渉の後に、それを正当化する根拠としてドイツ皇帝ヴィルヘルム二世は「黄禍」の脅威を説いた。このことは、当時の日本の知識人、政治家に、三国干渉の屈辱とともに、「黄禍」論に対する強烈な拒否の姿勢を植えつけたと思われる。たとえば、政治家で海外思想にも通じていた島田三郎は、日露戦争直前の講演で、この「黄禍」思想が「事実に見られたのが三国干渉の時の手伝となったことは諸君の御承知のことです」と述べて、「是実に独逸の権力を持つて居る人 [カイザー] の一種の機略に成ったもので、……一たび事実を試みられたには相違ない」と続けている<sup>(13)</sup>。このようなコメントにも明らかなように、日本では三国干渉において、「黄禍」思想が影響力を強く持ったと信じられている。しかしそれは、どの程度まで政策決定に影響したのであろうか。また、そもそもカイザーが説いたという「黄禍」思想はどのようなもので、なぜそれを説いたのか、またそれは皇帝独自の考えであったのか、それとも誰かから吹き込まれてのことだったのだろうか。

カイザー自身の「黄禍」思想は、三国による遼東半島の返還勧告の3日後の4月26日付けで、カイザーがロシア皇帝ニコライ二世宛に送った手紙に、最も端的に現れていると言われている。その中でカイザーは、ツアーが「日本に対抗して、ヨーロッパの利益を守るため、ヨーロッパが連合して行動を取るように主導した見事なやり方に心から感謝する」と伝えた上で、「アジア大陸を開拓し、巨大な黄色人種の攻撃からヨーロッパを守ることが、ロシアの将来の偉大な任務であることは明らかである」と述べている<sup>(14)</sup>。ここには、「黄禍」思想の要素としての黄色人種の脅威と、それに対抗する手段としてのヨーロッパの連合（三国干渉ではそれは不完全な形でしかなかったが）とが述べられている。しかし、この書簡は、当時はむろん公開されてはいなかったし、ツアーがこの書簡をどう受けとめたかも実際のところははっきりしていない。実際、三国干渉の政策決定過程をみると、「黄禍」思想の影響はほとんどなかったか、あったとしても政策決定を促す主たる要因ではなかったと思われる。



まず三国干渉（1895年4月23日）に至る過程を見てみよう。最初に介入の決定をしたのはロシアで、1895年2月の極東問題に関する特別会議でのことである。この決定では、英仏と連合して干渉することが決定され、両国に働きかけがなされている。これにたいして、東アジアに英露協調が進むことに危機感を抱いたドイツは、日本に領土要求を断念させることと、ロシアと協調するというふた通りの政策を実行する。3月にドイツは、領土割譲は列強の干渉を招くと日本に警告しながら、一方、ロシアに共同行動を提議したのである。日本側も干渉の動きを察知して、清国分割提案をするが、列強の同意を得られなかった。4月8日、ロシアは列強に共同干渉提案をした。ドイツ、フランスはこれに同意したが、英国は政策転換をして、むしろロシアの南下にたいする防壁として日本を評価して、干渉に加わらない旨の決定をした。英国の離脱は、干渉の発起人とも言うべきロシアには打撃ではあったが、4月17日に独仏に正式に干渉を提起し、23日に三国の日本駐在公使が外務省を訪れ、干渉の意思を通告した。

以上の政策決定過程で注目すべきことの第一は、三国干渉で主導的役割を果たしたのは、ロシアであったことである。特にロシア政府内で干渉の必要性を主張したのは、ウィッテ蔵相であったことが知られている。しかし、その回顧録を見る限りでは、日本と中国の黄色人種の連合ができあがることを恐れて、干渉を決意したとは思えない<sup>(15)</sup>。また、干渉をめぐるロシアの政策決定過程において、ロシア外相ロバノフ・ロストフスキーは、ツアーに二種類の覚書を提出し、その一つでは「ロシアのもっとも恐るべき敵」であるイギリスに対抗するために、日本と同盟する方策も提起している<sup>(16)</sup>。むろん、それは採用されなかったが。

注目すべき第二の点は、当初の干渉のための連合には、ドイツが加わっていなかったことである。ドイツとしては、露英仏三国により「ドイツ抜き」で中国分割が行われるのではないかという危機感を抱いており、進んで自ら干渉に参加する意図をロシア側に伝えるなど動きを活発化させている。それは、極東において「孤立」することを恐れた結果とも言える。そのようなドイツにとっては、「黄禍」の脅威を説き、ヨーロッパの団結を訴えることは、孤立解消策としても有益であったろう。実際、干渉のおよそ1か月前の3月25日と27日に、ドイツ外相マルシャルは、ロシアの外交官と会談し、「黄色人種の連合、それは危険である」と述べ、また次のようにも発言している。「日本人も中国人同様、黄色人種に属している。彼らはすでに中国人の見方では、大いなる威信を得てしまった。彼らが後者に保護領を設けることに成功するならば、ヨーロッパ列強の利害に敵対し、黄色人種すべてにとっては共通の利害の一致をみる結果がもたらされるであろう」と<sup>(17)</sup>。この

ように「黄禍」の脅威をことさら強調している背景には、孤立化を恐れる気持ちが強く働いていたと推察される。

## 2. カイザーと三国干渉

ところでカイザーはどう考えていたのだろうか。カイザーは日本側の講和条件を知った際に、それが過大ではないと好意的評価を表明したとも言われている<sup>(18)</sup>。ならば、カイザーが政策転換をしたのはいつ頃で、どのような理由からであったろうか。カイザーの政策転換の時期は、はっきりとしない。カイザー自身が、日清戦争に関心を持ち始め、台湾取得に意欲を示すなど東アジア外交を活発化させるのは、1894年11月以降である。干渉の意思はこの頃から育まれていたとも言えようが、それが「黄禍」思想と結びつくのは、後のことと思われる。おそらく言えることは、何らかの形で介入する意思が最初にあると、それを正当化するために「黄禍」が利用されたのではないかということである。いずれにしろ、ロシアが三国干渉を主導した点からしても、「黄禍」を理由に三国干渉が生まれたのではないことは確かである。

しかし、「黄禍」論を唱えることは、カイザーの「世界政策 (Welt Politik)」にとって有益であった。一つには、ロシアを東アジアでの冒険に従事させることにより、東アジアで英国とロシアを対峙させることができることである。またもう一つには、そうすることによってドイツは、ヨーロッパにおけるロシアの脅威を減殺することができ、そのことはロシアと同盟関係にあったフランスの脅威も相対的に低下させることになる。また、ヨーロッパにおけるロシアの力の相対的な低下は、汎ゲルマン主義と汎スラブ主義が対立していたバルカン問題においても、ドイツに有利に作用することになる。こうして見ると、当時緩やかにできあがっていた英仏露のドイツ包囲網を弱めるために、カイザーが「黄禍」論を利用したとも言える。

だが、実際、カイザー自身、「黄禍」の脅威に対抗してヨーロッパが団結することを説いていても、それが実現すると信じていたとは思われない。第一次世界大戦後に出版された回顧録でカイザーは、三国干渉にドイツが加わったのは、「ヨーロッパにおけるドイツの政治的状況によるものだった」として、「黄禍」ではなく、当時のヨーロッパの国際関係にその理由を求めている。カイザーの見方では、当時ドイツは、ドイツに対抗するロシアとフランスに挟まれて身動きが取れずにいた。両国の軍備はドイツよりもはるかに進んでいたとカイザーは述べ、共同干渉の提案を拒否すれば、両国が英国に相談し、英国を仲

間に加えるだろうし、そのようなことがないようにするためには、「これらの強力なグループの提案に従うことが、我々には賛明な策だと思われた」と続けている。最後にカイザーは、当時の行動を正当化するかのよう、「この時に我々が取った政策もまた常に、世界平和の維持に基づいていた」と述べている<sup>(19)</sup>。

こうして見てくると、当時カイザーが、「黄禍」を憂慮すべき問題であるとどこまで真剣に信じていたかは、多少疑問に思えて来ないでもない。しかし、三国干渉の成功によって、カイザーが「黄禍」の脅威を外交で利用することが有益であると信じるようになったことは、充分推察される。その後の東アジアにおける義和団事変や日露戦争を経て、その先見性故にカイザーは、「黄禍」思想の祖と見なされるようになるのである。

### 3. フォン・ブラント「教導」説

ところで、このようなカイザーの「黄禍」思想は、カイザー自身が考え出した独創的なものだったのだろうか、それとも誰かカイザーにそれを吹き込んだ人物がいたのだろうか。この点については、当時のドイツの東アジア外交に、直接あるいは間接的に影響力を有していたフォン・ブラントが、カイザーを教導し、黄禍思想を鼓吹した「張本人」といわれている。

フォン・ブラントは、日本公使、次いで中国公使を勤めたドイツの外交官で、引退後も東アジアについての著作や論文を発表して、ドイツにおける対中・対日観や東アジア政策の形成に影響を与えた人物である。彼は日本の講和条件が明らかになり、ロシアが共同介入を提案したすぐ後の1895年4月9日にカイザーに謁見し、そのときにカイザーに「黄禍」思想を鼓吹したと言われている。ブラントはそこで、共同介入に賛成し、その理由のひとつとして、中国が日本に従属することによって引き起こされる経済上の変化が、中国と通商関係にある他の国々すべてに影響を及ぼすに違いないと述べている。同時に彼は、共同介入により、ロシアのヨーロッパにおける脅威が減殺されることも力説している<sup>(20)</sup>。

ブラントの「黄禍」思想がより具体的に現れているのは、三国干渉の年に出版された著作『東アジアの将来』と言える。この中でブラントは、ヨーロッパとアジアの、産業と商業分野での巨大な争いを確実なものとし、ヨーロッパの商業、産業、政治における利益を東アジアで守るために、ヨーロッパ連合の必要性を説いている<sup>(21)</sup>。

カイザーの「黄禍」思想の形成に、フォン・ブラントが大きな役割を果たしていたということは、同時代の人間にも知られていたことだった。ロンドンの日本協会の会長であっ

たアーサー・ディオシーは、この役割に注目して、謁見の際にブラントは、「日本がアジアの本土に足場を得ることを許された場合にヨーロッパが招くであろう危険をぎょっとするような光景として描き、皇帝がアジア政策を転換し、ロシア、フランスと共に日本を脅迫することに参加することを決心させたと思われる」と述べている。ディオシーの表現を借りれば、東アジア専門家のブラントは、ピアソンが『国民性情論』を出版して以来、西洋の思想家を定期的に襲って来た「黄熱病」にカイザーを感染させようと、雄弁に自身の意見を述べたのである<sup>(22)</sup>。

ブラントの考えが、カイザーの「黄禍」思想の原型となったということは、当時の日本の駐ドイツ公使青木周蔵の自伝にも見られる。青木は1895年5月の書簡で、中国<sup>びいき</sup>覇頂で「日本嫌の聞えある」フォン・ブラントが、カイザーやホーエンローエ首相を説得して、干渉に及んだと指摘している<sup>(23)</sup>。また、同月の別の書簡では、三国干渉の主唱者は「独政府に相違なし」と指摘し（実際にはロシアであったが）、フォン・ブラントとその政友の内意を次のように紹介している。

……日本人早きに<sup>およ</sup>遡んで清国南北部の要所を占領し、其の勢力を張らんには、清人は其の圧制的教導に感化せられ、余儀なく固陋の旧習を脱却し、<sup>つい</sup>尋で欧州流の文運を発達し、終に西人の後見を謝絶し、経済上に於ても欧州の農産物を輸入することなきに至るべし。しかのみならず、日清の間に於て、「亜細亜は亜細亜人に属すべしとの主義」に基由する協議相整ひ、攻むるにも守るにも互に応援援護すべしとの攻守条約を締結せんには、黄人の勢力益々旺盛となり、白人社会は危害を受くるや必せり。……<sup>(24)</sup>

ここに開陳されているのは、紛れもない「黄禍」思想である。

日本にいたドイツ人医師エルウィン・ベルツも、ドイツの新聞への寄稿論文（結局それはドイツでは掲載されなかったが）の中で、「ドイツの指導層の中で流布している誤った日本人に対する侮蔑と、フォン・ブラント氏の意見とは大いに関係があった」と書き、「不幸にして、彼は日本人に対してそのような侮蔑を抱いていた。ただし、彼は維新の時期の最初の頃の日本人しか知らなかった」と述べている<sup>(25)</sup>。

フォン・ブラントがカイザーに「黄禍」思想を鼓吹した「張本人」であることは、間違いないかもしれない。しかし、疑問点がないわけではない。というのは、カイザーにブラントが謁見したのは4月9日であるが、ドイツはすでに3月23日にロシアに共同行動を提議している。また、先に見たようにマルシャル外相は、3月末頃に「黄禍」思想ととれる

発言をしている。

これらの事実から推察するに、4月以前からカイザーが「黄禍」思想を抱いていた可能性も完全には否定できない。が、いずれにしても4月8日にロシアのロバノフ外相が列強に共同干渉を提議し、その翌日にブラントが謁見していることからすると、ブラントの意見がカイザーの最終判断に影響を与えたことは疑いない。またマルシャル外相の発言も、ブラントの影響からとも考えられる。少なくとも、ブラントが「黄禍」の脅威を説いたため、カイザーが突然意見を変えて介入を決意したとまでは言えないとしても、介入の意図もしくは必要性が先にあって、それを正当化する考えとして「黄禍」思想が説かれて、カイザーがこれを信じたとは言えると思われる。また、カイザーの思想に影響を及ぼしたのは、ブラントばかりではなかったろう。チャールズ・ピアソンの『国民性情論』（1893年）も、カイザーに影響を与えたと思われる。また後のヒューストン・スチュワート・チェンバレンの著作『19世紀の基礎』（1899年）も、カイザーのお気に入りの著作であったことが知られている<sup>(26)</sup>。

#### 4. 「黄禍」とドイツ社会帝国主義

これまではカイザーが「黄禍」の脅威を説いた理由を、主にヨーロッパの国際関係、あるいはカイザー自身の世界政策と言った外政面に求めて来た。しかし、その「黄禍」思想の誕生の理由を、外交と同時に内政面での必要に求める見方もある。

アーサー・ディオシーは、この観点からカイザーの意図を解釈している。ディオシーの考えでは、「黄禍」思想は、カイザーの冒険的な外交の正当化のみならず、その臣民を説得するためにも持ち出されたのである。ディオシーはこう書いている。

しかるべき時にロシア、フランスと極東で運命を共にしてしまっ、ドイツ皇帝は正当化を必要としていた。特に当惑させられた彼の臣民の見地からして。かれらはその時まで、日本の正義に熱狂していた。……ドイツの世論は、帝国の政策に沿っていなければならなかった。そのためには、脅威を論じることよりもよい方法があったらうか。不満を持った人々も、彼らの主君の知恵が、差し迫った危険から国民を救ったと認めさせられたに違いない。かくして「黄禍」の亡霊が持ち出され、田舎者がカブにシーツをかけた「幽霊」のようにあからさまに展示されたのである。臣下を怖がらせるために<sup>(27)</sup>。

ディオシーは皮肉を込めて、「国を治めるためのこの術策は、大きな人種的な問題に非常に興味を示す傾向にあるドイツの国民性と、カイザーの特異性ととの両方に実に見事に適合していた」と述べている<sup>(28)</sup>。

三国干渉へのドイツの参加は、それまでドイツと友好関係にあり、1880年代には政治・軍事面で多大な影響を受け、ある意味では「東洋のプロイセン」を目指していた明治政府にとっては、晴天の霹靂であったが、同じように日本との貿易に従事していたドイツ人、あるいは「東洋のプロイセン」日本の勝利に拍手を送っていたドイツの一般民衆にも、驚きをもって迎えられた。そのような国内の驚きを反感へと導かないためにも、より大きな脅威「黄禍」が論じられたのである。

こうして考えると、カイザーの「黄禍」思想は、その世界政策と同時に内政とも密接に関わっていたことが分かる。ヴィルヘルム二世時代のドイツを分析したドイツの歴史家ハンス-ウルリヒ・ヴェーラーは、その著作『ドイツ帝国1871-1918年』の中で、帝国主義を「防衛的な支配安定化のための戦略ならびに手段として」解明し、内政と外政を同一の社会安定化政策の両面として見ることを提唱している。ヴェーラーは、皇帝ヴィルヘルムの世界政策について、「内政上の目的のために外政がまったく冷静に計算された道具と化し」ていたと指摘している。同書でヴェーラーは、帝国主義を内政化するイデオロギーとして、社会帝国主義を位置づけている。それは「階級間の諸矛盾の統合イデオロギー」であり、「社会的現状と政治的権力構造とを成功した帝国主義によって正当化しようとする」意図や期待をになっており、同時に国内の改革努力を外へそらす効果も持っていた<sup>(29)</sup>。ヴェーラーの考えは、外政に対する内政の優位を強調し過ぎているかもしれないが、カイザーの「黄禍」思想も、外政面のみならず内政面からも説明され得るし、そこに社会帝国主義イデオロギーとしての性格を見ることもできよう。

次には、この「黄禍」思想の西洋世界での普及に多大な貢献をしたカイザーの寓意画をめぐる様々な議論・解釈を見てみよう。

#### IV. 皇帝ヴィルヘルムの寓意画に現れた「黄禍」

##### 1. カイザーの寓意画の流布とその解釈

カイザーの寓意画「ヨーロッパの諸国民よ」は、遅くとも1895年の夏までには完成し、同時に複製が作られた。この寓意画は、ディオシーの言葉を借りれば、「世界中にセンセーションを」引き起こし、特に「ツアーにその原画が贈られたとき、センセーションは頂点に達した」のである<sup>(30)</sup>。またその複製は、ドイツでは官庁や東アジア航路の汽船にグラビア写真として飾られた。また1895年の終わり近くには、その解釈がドイツの新聞に掲載された。この絵は、ツアー・ニコライ二世を初めとして、フランス大統領フォーレ、アメリカ大統領マッキンレーといった内外の政治指導者や、王室関係者に贈られた。当時は引退していたビスマルクもこの絵を見ており、また英国にも渡っていたことが確認されている<sup>(31)</sup>。これらの寓意画が、「黄禍」論争の火付け役を担ったことは疑いない。ちなみにカイザーの書簡などから、同種の絵がもう一つ、1897年の終わりごろ描かれていたことが分かる。その絵では、「黄禍」に対抗するドイツとロシアの役割は、より鮮明になっている<sup>(32)</sup>。

「黄禍」の脅威が、これらの寓意画（特に最初の寓意画）を媒介して流布したという事実は、注目されていだろう。いみじくもこのことは、「黄禍」論がある意味で感覚的で映像的なイメージにいかにか頼っていたかを明らかにしているように思われる。「黄禍」は実際、このような漫画的な方法で訴えるのに、ふさわしい題材であったのかもしれない。その科学的な根拠は曖昧であったが、白人種の人々の潜在意識、固定観念の中にしっかりと根を下ろした人種的優越感と、同時にその優位が脅かされる危機感に直接訴えかけるには、百万の言説よりも一幅の寓意画の方が有効であったとも言えるかもしれない。

しかし、寓意画であるが故に、多面的な解釈を可能にしたことは否めない。またこれらの寓意画が、皇帝自身の「無知」をさらけ出す結果ともなったのである。実際のところカイザーは、これらの寓意画で何を象徴していたのだろうか。ここでは、最初の寓意画を中心に、その点を検討してみる（図-2参照）。まずは1895年の『ノース・ジャーマン・ガゼット』紙に掲載されたこの絵の解釈を紹介してみよう。この解釈は、ある意味で公式の解釈と言ってよいかもしれない。



十字架から発する光を浴びて、高台の岩のうえに立っているのは、……寓意的な姿の文明諸国である。一番前にいるのはフランスで、左手で目元をかざしている。彼女はまんざら、危険が迫っていることを信じていないでもない。しかし、ドイツは、盾と剣で武装して、迫りくる災厄に注意深いまなざしを向けている。ロシアは、豊かな髪の良い女性で、親友であるかのように彼女の武装した仲間の肩に手を置いている。このグループのそばに、オーストリアが毅然として立っている。彼女は、共通の任務にいまだに幾分消極的な英国の協力を得ようとするかのごとく、右手をのぼして、誘うような態度である。……多くの人物がいるこの武装集団の先頭には、翼をつけた大天使ミカエルが、右手に炎の剣を持って、鎖かたびらは身につけずに立っている。……この岩の高台のふもとには、文明化されたヨーロッパの広大な平野がある。……先頭にあるのは、ホーエンツォーレン家の城である。しかし、この平和な光景のうえに、災厄の雲がただよっている。……燃えさかる都市からの炎の海のなかに、アジア人の群が前方へ疾走して踏み荒らされた跡が明らかに見える。ひどく歪んだ顔のような形をしている煙の厚い雲が、大火災からわきあがっている。この陰鬱な構図のなかで、仏陀の形の恐るべき危険が王



座についている。中国の龍が、それは同時に破壊の悪魔を表しているが、この異教の偶像を背負っている。恐るべき始まりとして、「闇の強国」が、防御の流れの川辺に近づいている。少しすれば、すぐにこの流れも、障壁ではなくなる<sup>(33)</sup>。

この絵の中で、アジアについての象徴は、火炎を吐いている龍とその上に乗っている仏陀である。巨大な龍は中国を指すと考えてよいかもしれない。しかし、その上の仏陀は単純に日本を象徴している、少なくともカイザーはそう意図していたと、言い切れるだろうか。ある程度、そう推測することも可能であるが、断言することはできない。皇帝自身は「黄禍」に対する西洋の戦いを、宗教的には仏教対キリスト教の戦いと考えていた。そのことは、この絵のヨーロッパ側の崖の上に光り輝く十字架や、ツアー宛の書簡に明らかである。そこで、キリスト教世界の救世主を演じるためには、相手側にはそれに対抗する世界宗教の一つが必要で仏教が選ばれたと考えられる。しかし、当時の西洋の東洋理解の水準から考えても、東洋の宗教を仏教で代表させることには無理がある。その点からしても、カイザーの東洋理解は、かなり大雑把な単純化されたものであったことが分かる。

確かにこの絵には、ヨーロッパの国際関係を示す興味深い寓意も含まれていたが、東洋の脅威に関する部分には幾つかの象徴的な誤りも含まれていた。アーサー・ディオシーはこの点を詳しく指摘している。たとえば、『龍に乗った皇帝陛下』という表現は皇帝がこの世を去ったことを意味するので、攻め来る蒙古禍にとっては、竜は間違っただけの乗り物であると思われる」のであるとか、「奇妙なことに、この黄禍それ自身は、ただけしい外観を備えていない」という指摘である。ディオシーは言う。「子供がいっしょに遊ぶかもしれないような禍である。彼〔黄禍〕には、何か優しいお地蔵さんを思い起こさずにはおかないものがある」。カイザーは、『黄禍』の擬人化として、今日世界で最も非攻撃的な宗教である仏教の創始者を誤って選んだ」のであるとディオシーは述べている<sup>(34)</sup>。

## 2. カイザーの寓意画とヨーロッパの国際関係

このように、アジアの象徴がかなり皮相な知識の上に成りたっているのに比べて、ヨーロッパの女神たちは微妙なヨーロッパの国際関係とカイザーの願望を表している。ディオシーの解説では、ドイツの肩に手を置いているロシアに対して、フランスは「二人が仲よくしている方など二度と見るものかというように」、「黄禍」の方を見つめている。オーストリア女性は、イギリス女性の腕をつかんで「優柔不断なイギリス」を同盟国の側に引き

込もうとするかのようなのである。この寓意画では、露仏間の接近に楔を打つかのように、露独が仲むつまじい姿を見せ、ドイツの同盟国であるオーストリアが英国を仲間に誘おうとしている。オーストリアの後ろには、同じ三国同盟国のイタリア、英国の陰にいるのは（ディオシーによれば）おそらくポルトガルで、絵の最後尾にはスペインが続いている<sup>(35)</sup>。これらの姿を見ると、この絵がもっと別なことを語りかけているようにさえ思えて来る。つまり、この寓意画も、複雑なヨーロッパの国際関係の産物であるということである。カイザーの叫び「ヨーロッパの諸国民よ、汝らの信仰と祖国の防衛に加われ！」も、裏から見れば、多かれ少なかれ孤立の度合いを深めていたヨーロッパにおけるドイツの立場を逆説的に浮かびあがらせていると言えよう。

さらに興味深いのは、当時の人々のこの絵の受けとめ方である。同時代人の反応は賛否両論様々であるが、どちらかと言えばその寓意画を歓迎するよりは、嘲笑の材料としていた。この絵を見た一人のビスマルクは、「その絵の意味がはっきりと分からないので、その絵について考え、それについて何を言うべきか熟慮しなければならない」とある外交官に告げている。ビスマルクも、仏陀が何を象徴するか分からないで悩んだらしい。「仏陀が解釈の邪魔になっている」と彼は述べ、「仏陀が汎スラブ主義を現していると、取り巻きの人々はツアーに信じ込ませようとしている」と、うがった解釈を披瀝している。またこの絵が当時のフランス大統領フォーレに贈られたことは、ビスマルクの笑いを誘った。しかし、この絵の寓意を、真面目に受け取めた人物もいた。ツアーに直接この寓意画を渡す役目を果たした、当時は陸軍大佐で、第一次大戦時に参謀総長となるヘルムート・フォン・モルトケは、カイザーの独創的な考えに疑いを持っていなかった<sup>(36)</sup>。

同時に早くからこの寓意画は、嘲笑の材料ともなっていた。ドイツの労働者向けのグラフィック雑誌である『ヴァーラー・ヤコブ』誌の1895年12月号は、この寓意画「ヨーロッパの諸国民よ」の社会主義者版のパロディを掲載している。題して「立ち上がれ！ ヨーロッパの警察よ」（図-3参照）<sup>(37)</sup>。この絵の中で、王冠をかぶり剣を携えている太った男は、恐らくカイザーである。女神たちの代わりに丘の上には、ヨーロッパ諸国の警察官たちが立っている。それに対峙して、もう一方には、仏陀と龍の代わりに、自由の女神と見受けられる女性が片手に「自由、博愛、平等」と書かれた旗を持ち、「搾取」という名の龍を踏みつけている。彼女に従っているのは、労働者たちである。そして彼らと警察官たちとを分ける川の名前は「階級闘争」である。このパロディは、ヨーロッパ諸国の支配者たちによる社会主義運動の抑圧を皮肉っているのである。

もう一つのパロディは、同じ『ヴァーラー・ヤコブ』誌に、日露戦争の数か月前に、掲



載されたものである（図-4参照）<sup>(38)</sup>。この風刺画では、丘の上に熊にまたがったコサック兵がいる。明らかにロシアである。そして対岸には、万里の長城があり、その背後に中国兵が立ち、その先の島には銃剣を手にした日本兵が立っている。皮肉にもそのパロディのタイトルは、「アジアの諸国民よ、自らの権利を守れ！」である。ディオシーの表現を借りれば、「高貴な生まれ」<sup>(39)</sup>を誇っているカイザーの寓意画も、ここでは笑い話の材料でしかない。それは国際政治の世界で、奇矯な行動や発言で、嘲笑を誘ったり、響きや怒りを買うことが多かったカイザー・ヴィルヘルム二世の姿とも重なって来る。

## V. む す び

これまでに見てきたように、カイザーの「黄禍」思想は、三国干渉の正当化のために喧伝され、その寓意画とともに西洋世界に流布した。当時、メディアを賑わし始めた「黄禍」という語句は、カイザーの思想を現す絶好のキャッチフレーズであり、カイザーの思想とその寓意画に冠されるようになった。また、カイザーは「黄禍」の脅威を利用して、ロシアのツアーを極東での冒険に駆り立てた。

最後に、このカイザー、ツアーと「黄禍」の関係に若干触れてみよう。カイザーがツアーを教唆して、極東進出に向かわせたことは、カイザーのツアー宛書簡などにも見受けられる。しかし、ツアーがどの程度、カイザーの「黄禍」思想に共鳴していたかは必ずしも明らかでない。たとえば、前にビスマルクが指摘したように、カイザーの寓意画で「黄禍」が示しているのは、日本や中国ではなくて、ロシアであるとロシアが勘ぐったとしても不思議はなかった。事実、ヨーロッパにおいては、ロシアをアジアに属するアジア人の国と見なす考えは根深くあった。そして、ドイツ皇帝も、このロシアのヨーロッパとアジアにまたがる二重の性格を利用しようとした。

日露戦争後、ツアーと会談した際に極東情勢について意見を求められたカイザーは、次のようにロシアがとるであろう二つのコースを示した。ロシアがヨーロッパの文化国家と自らを見なしているならば、「黄禍」にたいするヨーロッパの防衛に加わるべきであるが、「ロシアが自身をアジア人と見なしているならば、『黄禍』と連合し、それと力をあわせ、ヨーロッパに猛攻を加えるだろう」と。ツアーはカイザーに、ロシアはどちらのコースを取るかと思ふかと尋ねた。カイザーは率直に「二番目のコース」と答えて、ツアーを怒らせた。その根拠を聞かれたカイザーは、プロシア・オーストリア国境にロシア軍が集結して

いることなどを理由にあげている。ツアーは、自分も自分の王室もヨーロッパ人であり、ロシアもロシア人もヨーロッパに忠実であり、黄色人種からヨーロッパを守ることを名譽なことと見なすであろうと述べたという<sup>(40)</sup>。

カイザーは一貫してロシアを極東に釘付けにし、ヨーロッパでのロシアの脅威を滅殺しようとしていた。それは、ある程度、成功したと言えるかもしれないが、第一次大戦の勃発を回避するには至らなかった。そしてカイザーも、第一次大戦中には「黄禍」思想に反するような行動をとらざるを得なくなる。第一次大戦も終わりに近づいた1917年、戦局がドイツに不利で、米国が連合国側について参戦する可能性が取りざたされていた時期に、ドイツ外相ツィンマーマンが駐メキシコ公使に宛てた秘密電報の内容が米国の新聞で暴露された。それは、米国が参戦した場合、メキシコがドイツと同盟し米国に宣戦を布告する。一方、ドイツは日本とは単独講和をし、ドイツ・メキシコ・日本からなる対米三国同盟を締結するという案を記したものだ。ちなみにカイザーは日露戦争直後から、米国にたいする「黄禍」の脅威を強調するプロパガンダーをおこなっており<sup>(41)</sup>、それは日露戦争後の日米関係の疎隔をもたらし一要因ともなったと言われる。そのような日米間の疎隔を、カイザーは自ら利用しようとしたのである。しかも、黄色人種の日本と同盟することによって。黄色人種の国家と連合する白人国家を裏切り者呼ばわりしたカイザーが、最後には黄色人種との連合を模索しなければならなくなったのは、皮肉なことである。カイザーの歯科医デーヴィスは、この電文を「カイザーの偽善の通達」と評している<sup>(42)</sup>。しかし、さらに皮肉なことは、ドイツの無制限潜水艦作戦で反ドイツ感情が高まっていた米国世論が、この電文の暴露によってさらに沸騰し、米国が同年4月の対独参戦へと向かったことである<sup>(43)</sup>。翌1918年、ドイツ革命の嵐のなか、カイザーはオランダに亡命し、ドイツ帝国は崩壊する。黄色人種の日本との同盟案が、「黄禍」の脅威を信じ込まされた米国世論を刺激し、対独参戦へと向かわせた——とさえ言い過ぎになるだろう。しかし、最後の最後になって、自ら種をまいて育てた「黄禍」思想に、カイザーが多少なりとも足を引っ張られたのは、歴史の皮肉と言ってよいだろう。

#### 《注》

- (1) Arthur Diósy, "The Yellow Peril (The German Version)," illustration, *The New Far East* (1898; rpt. London: Cassell, 1905) Frontispiece より転載。
- (2) ヴィルヘルム二世の寓意画については、次に論じたことがある。飯倉章「黄禍論の再解釈—カイザー・ヴィルヘルム二世の寓意画をめぐる一考察」『国際大学アジア発展研究所ニューズレター』第3号, 1993年, 3～6頁。本稿は、この小論に加筆するとともに、新

たな考察を付け加えたものである。なお先の小論では、「黄禍」と目されたアジア、特に日本や中国での反応に触れたが、本稿では割愛した。この点は、別に機会があれば、考察を深めたいと思っている。

- (3) Diósy 327-39; Richard Austin Thompson, *The Yellow Peril: 1890-1924* (New York: Arno Press, 1978) 1-2 を参照。なお、トンプソンの著作では、天使はガブリエルとなっている。
- (4) 桑原隲藏「黄禍論」(初出『新日本』1913年10号)『桑原隲藏全集(一)』(岩波書店, 1968年) 22~23頁。
- (5) Diósy 335 を参照。なお『レビュー・オブ・レビュー』誌では、標題は、「ヨーロッパの諸国民よ、汝らのもっとも神聖な宝を守れ!」となっている。“People of Europe, Defend Your Most Holy Treasures!” cartoon, *Review of Reviews* June, 1904: 550 を参照。
- (6) Arthur N. Davis, *The Kaiser as I Know Him* (New York: Harper, 1918) 102.
- (7) Thompson 4.
- (8) Kaiser Wilhelm II, *Ereignisse und Gestalten aus den Jahren 1878-1918* (Leipzig: K. F. Koehler) 66-68.
- (9) N. F. Grant, ed., *The Kaiser's Letters to the Tsar* (London: Hodder and Stoughton, [1920]) 237.
- (10) Heinz Gollwitzer, *Die gelbe Gefahr: Geschichte eines Schlagworts Studien zum imperialistischen Denken* (Göttingen: Vondenhoeck und Ruprecht, 1962) 42.
- (11) Gollwitzer 44.
- (12) Gollwitzer 44-46.
- (13) 島田三郎「国民の素養」『中央公論』(1904年2月~4月号), 引用は2月号, 22頁。
- (14) Grant, ed. 10-11. その後のカイザーによるツアーへの度重なる教唆には、「黄禍」思想とともに、帝国主義的イデオロギーである「文明化の使命」意識も強く見られる。なおカイザーからツアーに宛てた書簡集を *The Willy-Nicky Correspondence* と呼ぶ文献もあるが、次のように同名のカイザーとツアーの間の電文集(1904年から1907年)が存在している。Herman Bernstein, *The Willy-Nicky Correspondence: Being the Secret and Intimate Telegrams Exchanged between the Kaiser and the Tsar* (New York: Alfred A. Knopf, 1918).
- (15) セルゲイ・ウィッテ(大竹博吉監修)『ウィッテ伯回想記 日露戦争と露西亜革命(上)』(原書房, 1972年) 17~52頁。
- (16) 藤村道生『日清戦争—東アジア近代史の転換点—』(岩波書店, 1973年) 165~66頁。
- (17) Gollwitzer 43.
- (18) 黒羽茂『日露戦争史論—戦争外交の研究—』(杉山書店, 1982年) 12頁。
- (19) Kaiser Wilhelm II 68.
- (20) Gollwitzer 204-206, 208-11.
- (21) Gollwitzer 205.
- (22) Diósy 328.
- (23) 青木周蔵(坂根義久訳)『青木周蔵自伝』(平凡社, 1970年) 284頁。
- (24) 青木周蔵, 前掲書, 286頁。
- (25) Erwin Baelz, *Awakening Japan: The Diary of a German Doctor: Erwin Baelz*, trans. Anon., ed. Toku Baelz (1932; rpt. Bloomington: Indiana Univ. Press, 1974) 228-29.

- (26) 橋川文三『黄禍物語』(筑摩書房, 1976年) 23頁。
- (27) Diósy 329-30.
- (28) Diósy 328.
- (29) H-U・ヴェーラー(大野英二, 肥前榮一訳)『ドイツ帝国 1871-1918年』(未来社, 1983年) 249~60頁。
- (30) Diósy 327.
- (31) Thompson 1-2. Gollwitzer 206-208.
- (32) Grant, ed. 44-45. 1898年1月4日付けの書簡で, 前年のクリスマスの時期に描かれた寓意画を受け取ってほしいと書かれている。なお, カイザーとツァーの関係については, 平川祐弘「黄禍論と国際政治」『内なる壁-外国人の日本人像・日本人の外国人像』(TBSブリタニカ, 1990年) 293~314頁が詳しい。
- (33) Grant, ed. 18-19. これは, 『ノース・ジャーマン・ガゼット』紙に掲載された説明を, 英国の『モーニング・ポスト』紙が, 1895年11月11日付けの記事で再録したもの。
- (34) Diósy 333-34.
- (35) Diósy 331-33.
- (36) Gollwitzer 207.
- (37) “Rise, Police of Europe!: A Socialist Parody of the German Emperor’s Cartoon,” cartoon, *Der Wahrer Jacob* 20 Dec. 1895. Extract in the *Review of Reviews* Jan. 1896: v.
- (38) “People of Asia, Defend Your Rights!: A Parody on the German Emperor’s Cartoon,” cartoon, *Der Wahrer Jacob* n.d. Extract in the *Review of Reviews* Jan. 1904: 37.
- (39) Diósy 327.
- (40) Kaiser Wilhelm II 66-67.
- (41) たとえば, 『ニューヨーク・タイムズ』紙の一面を飾った次のような記事。“Kaiser Says Japan Will Control China: Wants the Powers to Unite against the Yellow Peril,” *New York Times* 6 Sept. 1905.
- (42) Davis 109.
- (43) この「ツィンマーマン電報事件」については, Davis 109-110 及び, 義井博『カイザーの世界政策と第一次世界大戦』(清水書院, 1984年) 138~40頁を参照。